アンコール遺跡修復を通じた日本の等身大の国際協力

中川武氏

取材・文 NPO法人 世界遺産アカデミー 客員研究員 飯島 一隆

カンボジア・トンレサップ湖の北に、9～15世紀にかけての栄華を今に伝える石造建造物群である、クメール王朝の旧都が約400㎢にわたり広がっている。

この遺跡はアンコール・ワット、バイヨン、プレア・カーン、タ・プロームといった多数の寺院、水利施設（池、堤防、貯水池、運河）、そして交通路から成り立っており、またこれらの建築の多くが、その地理的文脈と密接に結びつき、象徴的な意味を持っているという。よって、アンコールは文化的、宗教的、象徴的価値を体現する重要な遺跡であると同時に、建築的、考古学的、芸術的にも高い価値が認められ、世界遺産に登録された。

一方、クメール王朝がアユタヤによりシュムリアップ・アンコールの地からの退却を余儀なくされたあと、1860年にフランス人探検家アンリ・ムーオによって密林に埋没したアンコールが発見され、一躍世界的な脚光を浴び、フランスによってアンコールの修復が進められたものの、20世紀のカンボジア内戦により、修復は中断を余儀なくされ、遺跡の被害はさらに拡大した。

こうしてアンコールは、1992年に世界遺産リストに登録される同時に「危機にさらされている世界遺産リスト」に登録され、各国の支援を受けて修復が進められていくこととなる。この時、国際的なイニシアティブをとり、今もカンボジアに多大なる支援を続けている国の一つが日本であり、その修復チームの団長を務めている早稲田大学の**中川武**名誉教授に話を伺った。

アンコールの価値と魅力について

―― まず初めに、中川先生から見たアンコール、あるいはクメールの文明について、その魅力をお聞かせ願えますでしょうか。

私はアンコールよりも前にはベトナム、その前はエジプトで長年研究をしてきた経験から、アフリカやアジア・中国の文明がどのように伝播していったのか興味を持っていました。クメールの文明やアンコールそのものは、他の地域や文明のものとは決定的な違いがあると考えます。

例えば東アジアでは、中国文明を「中心」に置くと、韓国やベトナム北部は「周辺」域であり、日本は「亜周辺」域に位置します。周辺域は中心の影響を直に受けますが、亜周辺域は影響を受けつつもそこに距離や地政学的なクッションがあることにより、地域独自の選択性が発生します。ですから日本は中国古代文明の影響を受けつつも、武士政権や幕府制といった独自の時代を築いてきました。この考えは、柄谷行人さんが文明一般の構造について述べたものですが、私は古代であれば、その文明の中心を成す建築様式について、より明確に当てはまると考えています。

古代インド文明の建築様式や遺跡を「中心」に置くと、クメール遺跡は「亜周辺」に位置し、クメールは当然インドの影響を受けつつも、クメール独自

のものに発展し、またそれを主張しすぎない形で残されてきました。私はアンコール遺跡には、確固とした存在感と、遺跡周辺の森や大地、青空に、気持ちが広がっていく開放感、そして文化や歴史に対するそれぞれの時代の調和性、力強さと柔らかさのようなものを初めて感じました。それは神像にも、建築にも感じましたし、一方でそれはインドやエジプトには感じなかったものです。もちろん、アンコールはインドやエジプト等の文明・歴史があったからにも因るものですし、だからこそ世界遺産はその繋がりを伝えるものとして重要で、素晴らしいと思います。

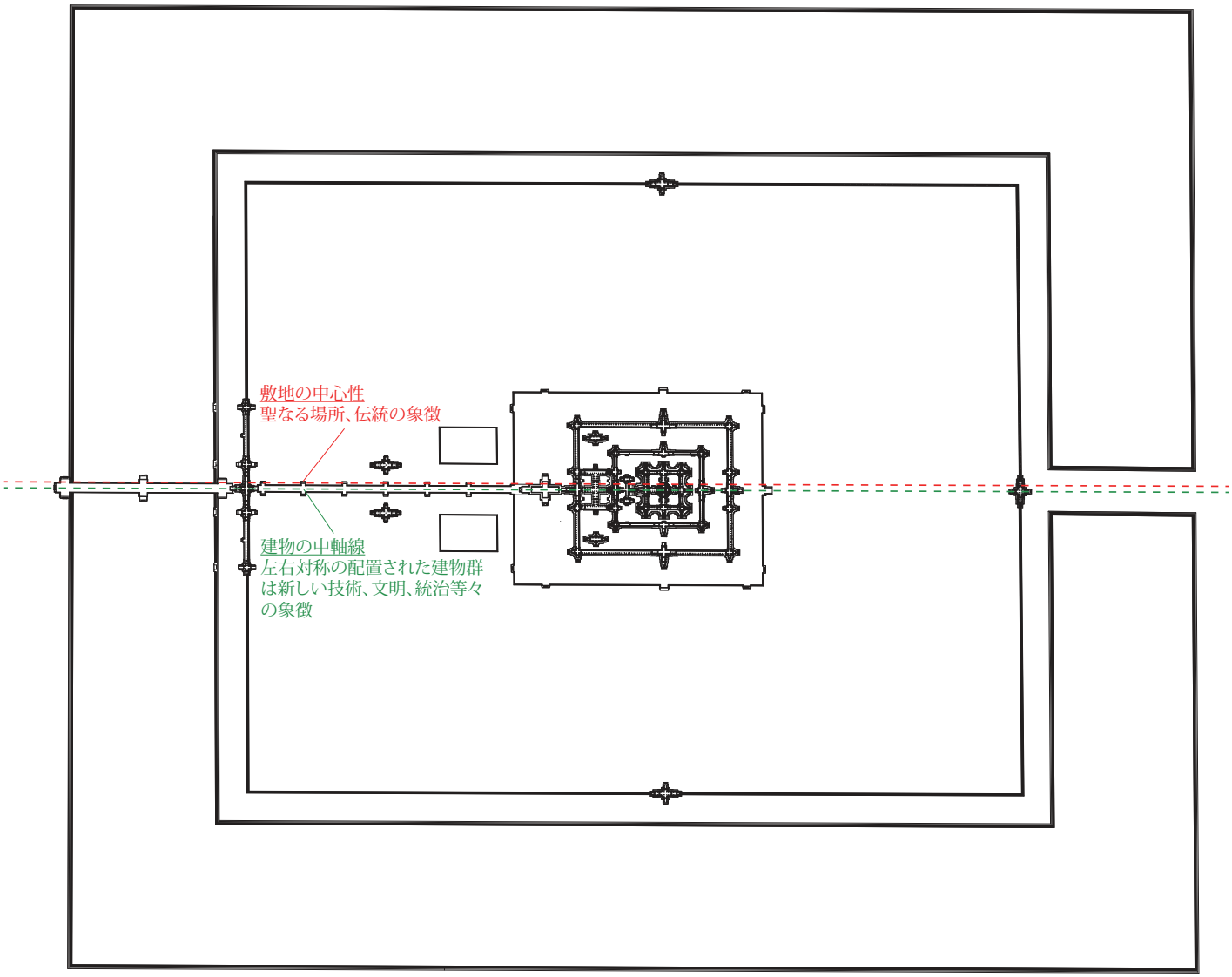
―― 以前、ユネスコ事務局長の顧問をされていた服部英二先生から、文明の転生という話の中で、文明は生き物のように移動し、子を孕んで新たな文明を築いていくという話を聞きました。中心から周辺、そして亜周辺という構造的な変化があるというお話はとても興味深いです。

この構造を理解するのに文化遺産は重要な役割を持ちます。そもそも文化遺産とは何でしょうか。古代的、中世的、近世的、近代的な価値があるとき、その遺産の価値は歴史の積み重ねの上にあります。そしてその各層に各々の時代の主体性の決定と創造が存在し、こうしたものが実在した証拠として残されているのは文化遺産しかありません。

例えばアンコールはインドの影響を受けているが、直接的な影響ではないことが、遺産としての建築から認識することができます。インドでは、例えば本尊を入れるものはその建築の中心には置かないように、「世界の重要なものは中心には置かない」とする思想があります。一番それがインドの外で示されているのはインドネシアでしょう。プランバナン寺院では、例えば聖なる泉や先祖に関わる場所等といった、古来からの長い歴史や自然の敷地としての中心線がある一方、伽藍や参道等の建築の中心軸が別々に存在し、それらは完全には一致しないことが誰にもわかるように明示されています。伽藍を建築する際に敷地の中心線と合わせず、敢えて意図的にずらしているのです。

アンコール・ワットの場合、参道と建築の中心軸は、敷地の中心線から約1.5m南にずれています。アンコール・ワットの他にも、アンコールの主な寺院

▼バイヨン遺跡　修復第1フェーズ作業



▲アンコール・ワットにおける2つの軸線

はすべて各敷地の中心線とずれています。多くは実測し、図面にしないと分かりませんが、アンコールの遺跡は線対称の建築なので分かる人には分かります。

このように、先祖代々伝わる聖なる場所の中心線と、その後建築という新しい文明、文化、権力、統治の象徴としての軸とが、重ならないようにずらして作られていることが、双方の歴史、あるいはそれらの重層と調和を大切に保存してきたことを示しており、建築からはかり知ることができるのです。

―― なるほど、文化遺産は歴史の積み重ねで成り立っており、特にインドの文明の影響を亜周辺域で受けつつ独自に創られたアンコール遺跡では、中心線をずらして参道や伽藍が建築された。そのことが考古や歴史の分野ではなく、建築だからこそ見えてくるアンコールの特徴なのだと理解しました。

1992年、私が最初にアンコールを訪れた時に、初めて実物のバイヨンを目の当りにして驚いたのを覚えています。これは彫刻か、建築か。巨大な戦士たちが固唾を呑んでいるようにも、今にも叫びながら駆け出していくようにも見えました。それでいて満月の夜のアンコール・ワットでは、礼拝する人々を巨大さや芸術の力で圧倒するのではなく、聖なるものが自ら寄り添っていくような、包み込むような柔らかさを感じましたね。

修復の歴史と日本の支援について

―― ここからはアンコールあるいはカンボジアに対する日本の活躍についてお話を伺いたいと思います。当時のカンボジアは文化財修復以前に政情が不安定であった中、日本は、第二次世界大戦後の日本外交において、1990年の「カンボジアに関する東京会議」といった第三国の紛争解決を目的とする国

際会議を初めて主催するなど、カンボジアの和平に貢献してきたものと認識しています。

はい、当時はまだカンボジアの日本大使館は閉鎖されていた状況にあったにも関わらず、駐タイ王国大使館公使と兼任であった駐カンボジア臨時代理大使の池田唯氏や外務省が大変ご尽力されておられました。今でもカンボジアの人々からは、日本のおかげで平和や社会復興への道が拓けたと感謝されるときがありますよ。

文化遺産の保全の観点では、それまで日本の国際的な貢献は実質上ほとんどなされていなかったのですが、この頃は例えばボロブドゥール遺跡の修復に、千原大五郎氏（東南アジアのヒンドゥー・仏教建築を専門）の派遣や修復方法の策定、そして金銭的な支援も始まりました。私はもともと同じ早稲田の吉村先生と同じくエジプトの研究をしていましたが、私は千原先生のアジア建築史分野の教え子でしたので、その関係でアジアにも興味を持つようになりました。トヨタ財団の研究費を獲得して、学生たちを連れてスリランカの研究をしていた頃の話ですが、千原先生から、アンコールで日本の修復活動が始まるという話があり、1992年9月に突然、外務省の文化交流部長から電話がかかってきて、すぐにアンコールに行ってほしいと。

当時アンコールでは、上智大学の石澤先生や1991年にアンコール遺跡の救済に民間レベルの協力を確立するために発足した、財界人を中心とした「アンコール遺跡救済委員会」が活躍されていました。この委員会は、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団を事務局とし、会長が平山郁夫氏、副会長に千原先生でした。私は千原先生から、アンコール遺跡を修復するに当たっては考古学だけでなく、工学の知識・技術も必要で、アンコールの修復には長い年月が必要だろうから若い人に担ってほしい、というような示唆も頂いて、引き受けることにしました。

そしてユネスコ文化遺産保存日本信託基金によって、1994年11月に日本国政府アンコール遺跡救済チームJSA（Japanese government team for Safeguarding Angkor）が結成され、アンコール・トム・バイヨン寺院の北経蔵の保存修復事業が開始されました。

―― この頃、まさに1992年にアンコールは世界遺産そして危機遺産リストに登録されたとき、日本はちょうど世界遺産条約を批准した時期だと思いますが、日本による支援については世界やカンボジアではどう受け取られたのでしょうか。

国際的な支援にも様々な手法があります。例えばフランスは一番語学に力を入れる。それは国際会議ではフランス語と英語以外は認めないとする姿勢や、カンボジアの上流階級は皆フランスに留学に行っていたこと等によく表れていると思います。それだけ語学の重要性を認識している。ですから、実際現地に入ってみると、各国から考古学等の専門家は来ているが、肝心のカンボジア人は語学を学んでも修復方法が分からないということが分かってきました。

そこでまずはユネスコの事務方に、日本の修復工事の方法を移植していきました。日本では修理前調査で、どこが傷み、どう修復するかを検討し、そしてどう直したのかの結果の記録を残すのは当たり前です。特に木造建築では、一度解体するという工程が組まれます。例えば組木は外し、傷んだところを直し、直したあとはもとに組み直さなければなりません。そのため、その過程や結果を記録し、報告書にまとめるのが基本でしたが、共同議長国のフランスをはじめ、当初はどの国もそれをやりたがりませんでしたね。その点、日本の文化庁の調査方法は非常に素晴らしいと思います。精度も高かった。

カンボジア側はカンボジア政府組織APSARA（Authority for the Protection of the Site and the Management of Angkor Region）がカウンターパートです。10年間の初期技術移転が済んだ後、我々JSAとAPSARAとが、現場スタッフ人件費と現地収得資材費を半々くらい予算を出し合い、協力体制（JASA）を組んで修復していきました。現地のワーカーさんやドライバーも含めると多いときは（予算も多かったので）200人くらい居たと思います。若い人が多く、平均2, 3年で人が変わる中、それでも20人くらい長期勤続の人がいて、特に最初のころのメンバーは今でも働いています。今では現地のワーカーさんは30人程度でしょうか。日本からの駐在員も以前は専門家が6人ほどと、一般財

▼修復活動を行うワーカーさん

団法人日本国際協力センター（JICE）アドミニストレーターのスタッフが1人いましたが、今は2名です。

現地からの日本の評価は高かったと思いますよ。私は彼らとの等身大の交流が現在も最も重要だと考えます。コミュニケーションが第一です。ワーカーさんの給与を少しでも上げることが最大の支援ですが、予算面の制約や日本だけ突出することは避けたい等で難しく、私たちは皆で何のためにアンコール遺跡の保存を協力してやっているのか、等々のことを極力お互いに話合うようにしています。こうした等身大での付き合いというのがとてもよかったし、アンコール、そしてカンボジア人の魅力だと思います。

―― 等身大の交流、それが長期的な支援に繋がっていると認識しました。修復の作業についてももう少し具体的にお聞かせ願えますでしょうか。

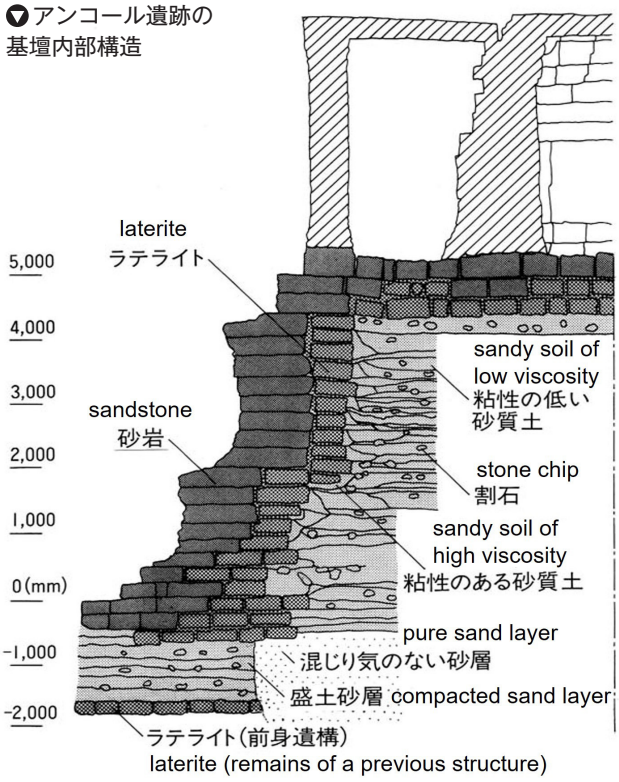
私はアンコールの特徴、そして重要な点は何と言っても、版築による基壇だと考えています。版築は土と砂を水で締固めて作られています。その上に建築が積み重なっており、破損している部分はあるものの、数百年も残っているのです。例えば西洋の建築の特徴はアーチでしょう。冒頭に文明の構造について話しましたが、アーチは興味深いことにミャンマーより東には来ていません。

私は現地のワーカーさんに、基壇の構造や版築の技術を教え、修復してきました。修復には今ではクレーンも破損石材の修理のための接着剤も、場合によっては使うこともあります。ただ、これにばかり頼ると、先ほどの等身大の交流も損なわれるのです。

例えばフランスはコンクリートで修復しようとします。その方が経済的だし丈夫で安定します。しかしアンコールの場合は、砂と土の版築の基壇の上に建築があるので、見た目には感じられないほどわずかに動きが生じます。これをコンクリートで修復してしまうと完全に固定されてしまい、本来のわずかな動きが生じません。その点では、柔らかな木材を扱う日本建築の修復技術が向いているでしょう。

この基壇の重要性を理解されない国による修復も実際には行われており、例えばバイヨン中央塔の修復の際、発掘には力を入れるが、発掘後の地盤を元に戻すのにおざなりになることもありました。バイヨンの中心15m位下には水脈があり、雨季には地上に浸水してくるため、一度掘った大地は地盤が緩

▼アンコール遺跡の基壇内部構造



んでしまうのです。我々は日本の代表としてこうした発掘や修復に対して意見を述べますが、現実にはなかなかAPSARAに通らないこともあります。APSARAもまた各国の支援を受けており、日本の意見がすべて通せるとは限りません。また我々もなるべく現地や他の国と良い関係で修復していきたいのです。

アンコールが世界遺産であるからには、国際的な修復方法にも従う必要があります。1994年に奈良ドキュメントで改めて問われた真正性の担保は重要です。

私は部材がすべて残っていれば修復できる。1つ欠けている場合は類推できる。連続する2つ以上が欠けている場合は復元すべきではない。という考えをできるだけ守るべきだと考えてきました。これは西洋の修復理論ともまた違うでしょう。ただ、いずれにしても、それで復元するかどうか、最終的には地域が決めるべきだと考えます。専門家としてはここまでできるが、やるかどうかの判断は現地にゆだねるべきだからです。

一方、ゆだねられたカンボジアが、その判断すべてを地域の一般の人々に解放出来るとも限らないことも承知しています。アンコールはすでに、カンボジアの遺産であるとともに世界の遺産でもあるからです。だからこそ、そこにUNESCOの介在が必要だと思うのです。そして現地政府に報告する一方、専門家の知見において、地域一般の人が理解し判断できるように開放する努力を極力進めること、この

ことが、等身大の付き合いの内実だと考えてきました。言うは易しで、じくじたる想いの方が大きいのですが、その努力をしないならば、外国の文化遺産の保存協力に参加するべきではないでしょう。

真なる国際協力とは

―― JSAの協力によってバイヨン憲章、そしてアンコール憲章が創られたと認識しています。

アンコール遺跡の保護と発展のために、各国や組織が提供する支援調整の役割を担うのが、International Coordinating Committee（ICC）です。この会合は当初年2回の本会議の他、年2回の技術会議が行われ、技術会議の方ではアンコールの修復技術に関わる議論が交わされることになっていました。各国プロジェクトの個別の事情があったり、政治的思惑があったりで、必要で十分な専門的議論の場が必要と感じたので、JSAによるこれまでの保存活動の経験と成果に基づくとともに、JSAが主催し、APSARA機構の領導と UNESCO事務局による国際会議等の議論を通じて、参加した各国専門家より提言された項目を受け、バイヨン憲章は起草されました。そしてバイヨンの修復を当面の目標にしていましたが、極力アンコール全体に広げたいと考えていましたし、アンコール憲章はそのように発展させたものと考えています。しかし、私からすると、アンコール憲章の決定的な問題は、基壇のことが書かれてないことです。我々は基壇が大事だと言ってきましたが、反映されませんでした。

地域にとって重要なのは何でしょうか。

例えば、日本においては、法隆寺などの古代建築は中国から来た大工技術が創ったものです。そうした建築は時代とともに小さな組織でも出来るようになり、近世になると半農半工が広がり、次第に庶民住宅にまで高度な技術が広がっていきます。

私はこれをアンコールで実現したい。アンコールは大工技術もありますが、結局は石工技術ですから、その技術や芸術的なアプローチまでを蓄積させた先が、真のアンコールの修復の完成だと思います。

実は遺跡修復そのもの以外に、カンボジアでは現地の子供や学生たちに、美術や芸術についても教えてきました。芸大等の先生からスケッチを描かせたり、日本の一流の建築家から写生の技術を伝えると伝わりやすいんですよ。アンコール・クラウ村にそういうフリースクールを作って、今は幼稚園等に

▲クラウ村におけるデッサンワークショップの様子（2025年11月）

▲クラウ村における石彫ワークショップの様子（2025年11月）

なっています。もちろん、日本以外にも各国の支援が入っていますが、教えているのは英語とパソコン。それはそれで大事なことですが、絵を描いたり歌を歌う、そしてアンコールの歴史を学ぶことが、カンボジアの子供たちにとっては重要ではないかと私は思うのです。

こうした教育施設は、各国の支援でコンサル等が入って多く造られているのですが、どれも似通ったものばかりで、使われず持て余している現実を見てきました。私はそういう施設を、できるだけオープンな形で自分でスケッチし、皆で協力して作りました。

―― それもまさに、先生のおっしゃる等身大の支援の在り方ですね。周辺地域では他にも、世界遺産になって観光客が増えたことで、開発やゴミの問題なども発生していると聞いています。

観光に対しては、なぜアンコールが大切なのか、どこに価値があるのか、アンコールのオーセンティシティとは何か、を伝えること、そして観光客が理解することが重要ではないでしょうか。観光客がアンコールを訪れ、何か素晴らしい、良いと思うことを感じ取って、自分なりの考えに至り、その認識や

実感が例えば世界史に繋がるようなことが醍醐味だと思います。

オーセンティシティでいうと、例えばシュムリアップの夜の繁華街のパブストリートはカンボジア人のやさしさと何でも受け入れる観点では良いのですが、アンコールの歴史と雰囲気には全く関連がない。ホテルとパブストリートだけの旅ではバンコク等他のアジアの国々と変わらないでしょう。

一方、シュムリアップにも古い高床の住居・伝統的な建築が残されています。多くはそういうものの保存には関心が薄い（商売が優先される）のが現実でしたが、一部の関心ある地域住民と5, 6年ほど一緒に調査や保存活動を行ったことがあります。なかなか最初は参加者が集まらなかったのですが、そこに防火や防災の観点を取り入れると、人命にも関わるので地域住民も真剣に携わってくれましたね。早稲田大学関係の防災専門家に参加していただき、訓練やポンプで川から水を引いて放水するなど。こうした少しの工夫とインセンティブは必要かも知れませんが、町並み保存もアンコールや周辺地域の価値、そのオーセンティシティを守る点では重要だと思います。

▲中川氏とクラウ村やまなみフリースクールの雰囲気

中川武

1944年富山県生まれ。1967年早稲田大学理工学部建築学科卒。1984年より早稲田大学教授。2015年同大学退職、名誉教授。2001 ～ 2003年日本建築史学会会長。2014年より博物館明治村館長。専門はアジア、日本を中心とした建築史。1994年より日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JSA)団長、2004年よりJAPAN APSARA Safeguarding Angkor (JASA)共同代表。1995年よりフエ・ユネスコ会議国際専門委員を務め現地復興の国際的リーダーとして活動。1997年カンボジア王国より「サハメトレイ王国勲章」受章(同様に他4件)。2006年早稲田大学より「大隈記念学術褒賞（記念賞）」受賞。2012年「平成24年度科学技術分野文部科学大臣表彰」受賞。2019年春の叙勲で「瑞宝中綬章」受賞。

▲バイヨン遺跡修復第1フェーズ竣工式典の様子

編集後記

「ベニス憲章」（1964年）および「オーセンティシティに関する奈良ドキュメント」（1994年）にて述べられた文化的遺産に対する保存の精神を受け継ぎ、バイヨン寺院およびそれを中心とするアンコール地域の遺跡を対象とした保存活動の実践に供する指針を提示するものとして、2005年6月にバイヨン憲章が起草された。その第10条には、「～アンコール地域の修復事業に関わるか、あるいは今後関わりを持つ各国は、カンボジア人自らが、バイヨン寺院及びアンコール遺跡の保存修復活動を担っていくためにできる国際協力を考えることが原則である。～略～国際交流による開かれた人材養成がアンコールの特質である。」と記載されており、まさに中川氏の貢献の理念が述べられていると思われる。世界遺産登録と危機遺産リストへの登録から12年後の2004年、主にAPSARAが自前で保存修復の事業を実施できるようになったという理由で、アンコールは危機遺産リストから脱することとなる。

関連情報

- **JSA/JASAウェブサイト**
  https://angkor-jsa.org/
- **丸善出版　アジアの仏教建築ー仏陀の歩いた道には蓮の花が咲くー中川武 編集**
- **アンコール人材要請支援機構　ウェブサイト**
  https://jst-cambodia.net/
- **公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団 ウェブサイト（財団の活動事例）**
  https://www.bunkazai.or.jp/02bunkazai/02_07.html

制作：世界遺産検定事務局